

女子大生の子宮頸がん・乳がんに関する意識調査

Investigational survey on cervical and breast cancer to female university students

小林 洋子¹, 湯浅 洋子¹, 新堀 多賀子¹, 伊藤 由加里¹, 明渡 陽子¹

¹大妻女子大学健康センター

Yoko Kobayashi¹, Yoko Yuasa¹, Takako Niibori¹, Yukari Ito¹, and Yoko Akedo¹

¹Health Service Center, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：女子大生，子宮頸がん，乳がん

Key words : Female university students, Cervical cancer, Breast cancer

抄録

子宮頸がん発症が20歳代からと低年齢化しており，また乳がんの高い罹患率などから，若い世代から女性特有のがんに関する知識を持ち，健康への意識を高めることは重要である．そこで，本学女子大生で同意の得られた164名に子宮頸がん，乳がんについての知識調査を実施し，知識の普及啓発と自己管理能力の向上を目的とした．

子宮頸がん，乳がんの知識調査では，子宮頸がんの知識がある学生は，有意に乳がんの知識もあり，また子宮頸がん予防ワクチン（HPVワクチン）の接種を受けていた．HPVワクチン接種の有無別による子宮頸がんの知識の平均正解数は，ワクチン接種ありの正解数が有意に高かった．

全体で HPV ワクチンの接種率は 25.0%で，接種理由は家族や友人などの勧めが 58.5%と最も多かった．子宮頸がん検診の受診率は 8.5%と低く，HPV ワクチンを接種した学生においても 9.8%と同様に低い結果であった．乳がんの知識のある学生は，自己触診法の経験があるものが有意に多かった．また，自己触診法の認知度は高かったが，実際に自己触診法の経験のある学生は全体のわずか 14.7%に過ぎなかった．しかし，自己触診法の具体的な方法を知りたいと希望する学生は 81.6%と多かったことから，今後乳がん自己触診法の指導と女性のがんについての啓蒙教育を実施していきたい．

【目的】

近年，子宮頸がんの若年層での発症が増加しており，20歳の子宮頸がん公費検診の受診率も低いことが問題である．また，乳がんにおいても罹患率は女性のがんの第1位であり，大学生から女性のがんについての知識の啓蒙と教育は必要である．そこで，子宮頸がん，乳がんの知識調査から現在の学生の問題点と動向を把握し，学生の自己管理能力向上のために具体的な指導の方向性を見出すことを目的とした．

【対象・方法】

本学女子学生で健康センター利用者のうち，同意が得られた学生 164 名（平均年齢 19.4 歳）に子宮頸がんと乳がんに関するアンケート（それぞれ

のがんに関する知識，HPVワクチンの接種および子宮頸がん検診受診の有無とそれぞれの理由，食事や嗜好品などの生活習慣）を実施し，分析は Student's t-testを，相関係数はPearson係数を用いた．（**p<0.01，*p<0.05）

【結果】

対象者 164 名中回収率は，子宮頸がんアンケートは 164 名（100%），乳がんアンケートは 163 名（99.4%）であった．

1. 子宮頸がん，乳がんの知識調査（図 1,2）

子宮頸がんと乳がんの知識内容は，図 1,2 に記載したそれぞれ 10 項目と 5 項目で，全て正解ならば 10 点と 5 点と換算した．

子宮頸がんの知識がある学生は，有意に乳がん

の知識もあり($r=0.293^{**}$), またHPVワクチンの接種を受けていた($r=0.322^{**}$).

HPV ワクチン接種の有無別による子宮頸がんの知識の平均正解数は、ワクチン接種ありで 6.02 ± 1.72 点, ワクチン接種なしで 4.54 ± 1.94 点で, ワクチン接種ありの正解数が有意に高かった ($p < 0.01$).

子宮頸がんの知識において最も多く知っていた知識は、「頸がんの予防には HPV ワクチン接種が有効である」、「ワクチン接種しても検診は必要である」で、ともに 79.3% だった。ついで「頸がんが 20~30 歳代の若い人に増加している」が 73.8% であった。逆に「ヒトパピローマウイルス (HPV) に一生のうち 8 割が感染する」18.9%、「検診の公費負担対象は 20 歳からである」26.2%と低い正解率であった。

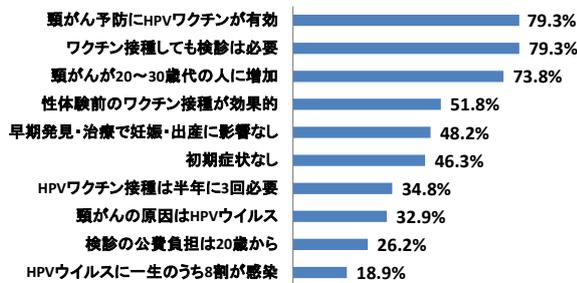


図 1. 子宮がん知識の正解率

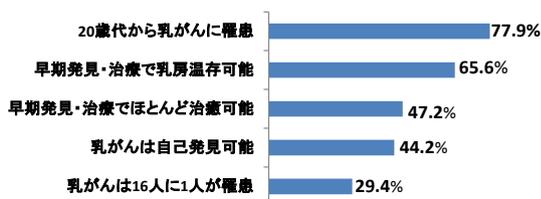


図 2. 乳がん知識の正解率

乳がんの知識では、高い正解率を示した順に「20 歳代から乳がん罹患する」77.9%、「早期発見で治療すれば、乳房は温存可能である」65.6%となり、反対に正解率が最も低かったのは「乳がんは 16 人に 1 人が罹患する」で 29.4% であった。

乳がんのリスクに関する知識では「乳がんの家族歴があるもの」のみ 74.8% と最も多く、それ以外の項目は正解率が著しく低く、「初潮が早い」5.5%、「ピルの常用」11.0%、「妊娠、出産歴なし」12.9% であった (図 3)。

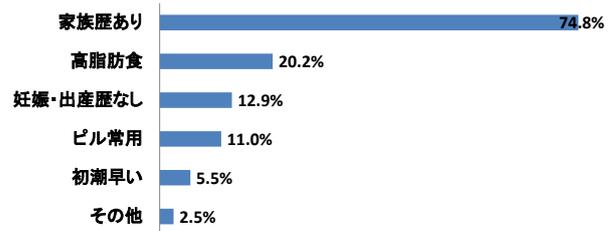


図 3. 乳がんのリスク正解率

2. HPV ワクチン接種率

全体で HPV ワクチン接種率は 25.0% であった。接種理由は、「家族、友人などの勧め」が 58.5% と最も多かった。また、ワクチンを接種している学生は、子宮頸がんに関する情報を「家族」($p < 0.01$) から得ていた。

3. 子宮頸がん検診受診率 (図 4)

子宮頸がん検診の受診率は 8.5% と低く、HPV ワクチンを接種していた学生においても 9.8% と同様に低かった。

検診を受診した理由で最も多かったのは「家族、友人などの勧め」で 42.9% を占め、順に「公費 (無料) 検診だから」28.6%、「がんの予防のため」と「症状があったから」が 21.4% であった。

未受診者において検診を受けない理由で最も多かったのは「20 歳の公費負担を知らない」44.0%、「これから受ける予定」34.0% であった。

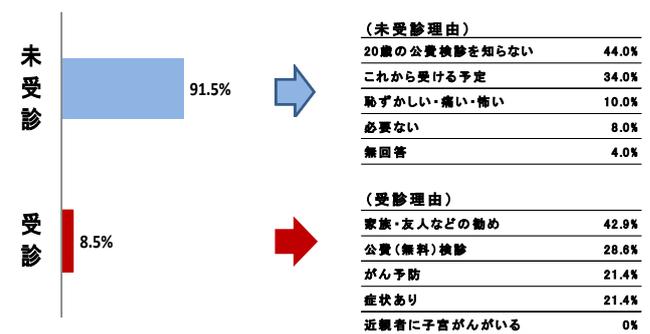


図 4. 子宮頸がん検診受診状況

4. 乳がん検診法についての認知度 (図 5.6)

乳がんの知識のある学生は、「自己触診法の経験あり」($p < 0.01$) が有意に多かった。

乳がん検診の方法に関する知識については、1 つでも検診方法を知っている学生は 86.0% であっ

た。また、方法別では、自己触診法が56.4%、マンモグラフィー52.8%と認知度が高く、超音波検査は14.7%と低かった。

自己触診法の認知度は高かったが、実際に自己触診法の経験がある学生は全体のわずか14.7%に過ぎなかった。しかし、今後自己触診法の具体的な方法を知りたいと希望した学生は81.6%と高かった。

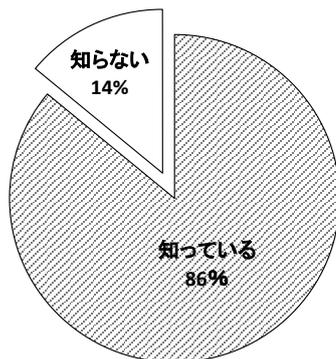


図5. 乳がん検診方法の知識

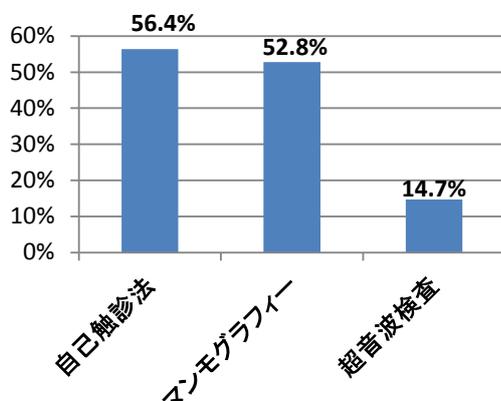


図6. 乳がん検診方法認知度

【考察】

子宮頸がんについての知識がある学生は、乳がんについても知識を持ち、HPV ワクチンの接種との関連性が見られた。これらの学生は女性のがんについても関心度が高く、自己管理意識も高かったと言える。しかし、女子学生全体において子宮頸がん検診受診の必要性を認識していたにもかかわらず、検診受診率は8.5%と低かった。同様に、HPV ワクチンを接種した学生においても、

子宮頸がん検診の受診率はわずか9.8%であった。この数値は、日本人女性全体（20歳～69歳）の受診率28.7%よりもさらに低い。子宮頸がん検診受診率は欧米諸国では70～80%である。子宮頸がん予防は、ワクチン接種のみでは不十分であり、ワクチン接種と子宮頸がん検診を併用することで効果があると考えられる。厚生労働省が副作用問題で予防ワクチン接種勧奨を中止している現在、より一層子宮頸がん検診受診を奨励していく必要がある。

乳がんについては、20歳代からの罹患があること、早期発見・治療により乳房温存可能であること、家族歴があるものはハイリスクであることなど、理解度は予想より高かった。また、乳がん自己触診法の実験経験のある学生は少なかったが、自己触診法を知りたいと希望するものが多かったことから、今後、乳がん自己触診法の指導と女性のがんについての啓蒙教育を実施していきたい。

女性のがんについて、新入生から正しい知識の健康教育の必要性が明確となった（図7）。

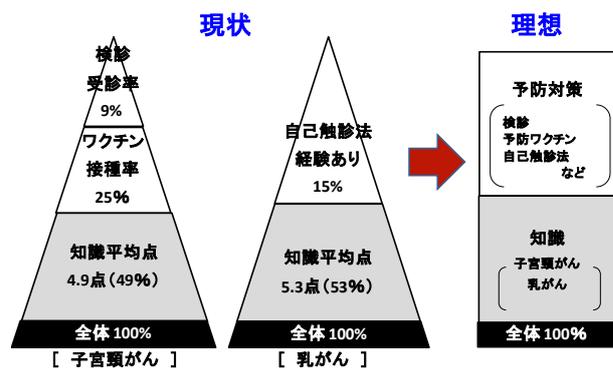


図7. 子宮頸がん・乳がんにおける健康指導の方向性

【付記】

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所「共同研究プロジェクト」(K091)の助成を受けたものである。

【参考文献】

[1]厚生労働省. 平成19年国民生活基礎調査: 統計表. 第8表 性・年齢階級別にみたがん検診受診状況(複数回答)別構成割合.

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/zentaiban.pdf>, (参照 2013-6-4).

[2]がん対策情報センター（国立がん研究センター）． がん情報サービス がん検診受診率（国民生活基礎調査による推定値）2010年．

<http://ganjoho.jp/data/professional/statistics/backnumber/2013/data12.pdf>, (参照 2013-6-4) .

[3]高橋真理子. 最新子宮頸がん予防ワクチンと

検診の正しい受け方. 朝日新聞出版, 2011, p.14-138.

[4]宮城悦子. 子宮がん. 主婦の友社, 2013, p.24-41.

[5]山内英子. 乳がん. 主婦の友社, 2013, p.12-65.

Abstract

As uterine cervical cancer occurrence has begun to observe at such younger ages as their twenties and higher rate of breast cancer incidence has been observed, it is important for female university students to have the knowledge about cancer associated with women and to raise their consciousness of health. Here we conducted an investigational survey on their knowledge about cervical cancer and breast cancer to 164 female university students who have made consent to this study with an aim of promoting their knowledge on female cancers and improving their self-care capability.

In this investigation, it was found that the students with the knowledge of cervical cancer also significantly had the knowledge of breast cancer, and that they also had a vaccination for cervical cancer (HPV vaccine). The number of average correct answers to the knowledge of cervical cancer was significantly higher with those students who had HPV vaccination.

Overall immunization rate for the HPV vaccine was 25.0%, and the most popular reason for the vaccination was a recommendation by family or friends, which accounted for 58.5%. Rate of medical examination for cervical cancer was as low as 8.5%, and those students who had HPV vaccine also showed low rate of medical examination like 9.8%. Many of those students with the knowledge of breast cancer had an experience of self-palpation method. Although the self-palpation method was widely recognized, only 14.7% of the students actually did the self-palpation method. Since there were many students (81.6%) who expressed a desire to learn the actual procedure of the self-palpation method, we will carry out the educational instruction on the self-palpation method for breast cancer as well as awareness campaign on female cancers.

(受付日：2014年5月16日，受理日：2014年5月27日)

小林 洋子（こばやし ようこ）

現職：大妻女子大学健康センター 保健師

慶應義塾大学医学部附属厚生女子学院卒業
埼玉県立衛生短期大学地域看護学専攻科卒業

大学病院にて看護師，企業，市役所にて保健師として勤務．1999年より大妻女子大学健康センターにおいて女子大生の健康管理業務に携わり，現在に至る．

主な著書：

大学における麻疹調査から考える感染症対策について

（公益社団法人 全国大学保健管理協会機関誌 CAMPUS HEALTH 平成22年2月）

肥満及び痩せ女子大生への保健指導について—現状報告と課題—

（公益社団法人 全国大学保健管理協会機関誌 CAMPUS HEALTH 平成23年2月）

肥満及び痩せの生活習慣の特徴と身体症状との関連

（公益社団法人 全国大学保健管理協会機関誌 CAMPUS HEALTH 平成24年2月）

月経症状に及ぼす生活関連因子の検討

（公益社団法人 全国大学保健管理協会機関誌 CAMPUS HEALTH 平成25年3月）